

「保育者養成」をめぐるメール書簡(1)

―省察(リフレクション)を通して学ぶ―

上垣内伸子

佐治由美子



上垣内と佐治は、入学年度が一年違いのお茶の水女子大学(以下お茶大)・児童学科の卒業生。上垣内は、現在お茶大の幼稚園教諭・教職科目の保育表現I(指導法)を担当している。

私たちは、保育者養成に携わる者としてそれぞれの授業展開について話し合う機会を得、それをきっかけに、互いの授業からヒントを見出すべくメールのやりとりを始めた。

上垣内は、十文字学園女子大学(以下十文字大)児

童幼児教育学科の二年生対象の専門科目「幼児教育基礎実習・演習」において、参加および参加観察実習と話し合いをセットにした授業を行っている。また、佐治は、お茶大発達臨床心理学講座の二年生対象の専門科目「保育臨床実習」において観察実習と話し合いをセットにした授業を行っている。お茶大のこの授業の原型は実は十文字大の授業にあり、この源流をたどる中で相互に学びうるものがあるのではと期待を抱いている私たちである。

メール書簡での語りに入る前に、それぞれの大学で展開している授業の概要をお伝えしておきたいと思う。

十文字大の「幼児教育基礎実習・演習」は二年次開講の必修科目であり、三年次から始まる幼稚園教諭や保育士の免許・資格取得のための実習とは目的を異にしている。幼児と実際にかかわり、一人ひとりの子どもの動き、人間関係、状況に応じて、その場で考え行動していく。子ども理解および保育者を目指す者としての自己理解を深めることを目的とし、附属を含む十数園の幼稚園に分かれ、後期に隔週で週一回、登園から降園までの実習を行っている。加えて、愛育養護学校での全日参加実習を一回行う。翌日に記録を提出し、翌週は、その記録をもとに約二十人のグループで話し合い（フィードバック授業）、その翌週は、また実習というサイクルを繰り返す。その後、春休みに四日間連続の実習を行う。これに先立つ一年次には、市

内の保育園と附属幼稚園、児童センターなどでの半日の観察実習を行っている。三・四年次のインターンシップを含め、四年間でステップ・アップしていくような実習計画を立てている。

お茶大の「保育臨床実習」は、毎週金曜（後期）の九時半ごろから一時間ほど（年度によって、履修者が多い場合は前半と後半の二グループに分かれる）主に附属幼稚園と附属ナーサリーで観察を行い、その直後に一時間ほど観察を振り返っての話し合い、そして翌週初めに、省察を経た観察記録を提出するというサイクルで展開していく授業である。また、この授業は、一年次の養護学校・障がい児放課後クラブにおける保育体験（必修）、二年次の「保育臨床実習（選択）」の保育観察・省察・記録、三年次の「発達臨床特別実習（選択）」のインターンシップ体験、四年次の「教育実習（幼稚園教諭資格取得希望者のみ）」という実習ラインの中に位置づく科目でもある。

上垣内から佐治への第一信

佐治由美子様

「保育臨床実習」に関する研究報告書^注をお送り下さいましてありがとうございます。短大時代から続く「幼児教育基礎実習・演習」と、方法やねらいなど共通点も多く、興味深く読ませていただきました。お茶大の「保育臨床実習」は、「広く社会の至る所で直接間接に関与する子どもの最善の幸福のために行動できる人材の育成」という、いわば広義の「保育者養成」カリキュラムの中に位置づけられる授業、それに対して私の所属学科は、保育者養成を主たる目的とする学科であり、「幼児教育基礎実習（以下基礎実習）」「幼児教育基礎演習（以下フィードバック授業・FB授業）」は、保育専門職に求められる資質とは何かを追究する中でつくりあげてきた授業です。

このように「保育者養成」の射程距離と範囲が異なる

実習でありながら、記録と話し合いを中心に、省察を「保育」の中に位置づけようとしているところに共通性をもつということは、省察（はやりの言い方をすればリフレクションということになるのでしようか）が、広義であつても、一般的意味であつても、「保育者養成」にとつて重要かつ不可欠である故ではないかと思われまふ。

十文字大の基礎実習は参加型の実習です。学生たちはその日の保育の中で一番印象に残ったエピソードを中心に記録をまとめます。自分なりのタイトルをつけることと、レポート用紙二枚にまとめるということが約束になっています。その日のうちに書いて、実際のエピソードと、それに対する自分の感じ取り方が書き込める長さということで、これに落ち着いています。

FB授業のねらいを、学生に対しては、①省察することを保育実習の中に位置づける、②自分の保育体験と仲間の体験を重ね合いながら共同的に保育を学ぶ、

と伝えていきます。保育の一日は実践で終わるのではなく、記録しながら一日を振り返り、子どもの姿や自分が自身がやったことを考えることをもって終わり、それが明日の保育につながっていくのだという、実践と省察の循環によって自分の保育が形成されていくということを実感してほしいのです。ですから、二時間たっぷり話し合い、一人ひとりの発言をていねいにすくひ上げるように心掛けていきます。

毎回、そのグループに共通する課題が書かれたレポートを取り上げ、その中のエピソードについて自分の体験を踏まえながら考えていくような話し合いをしています。「実習中は自分がどうしていいのかと不安な気持ちだったり、かわりながらもこれでいいのかと悩んだりすることがたくさんあったが、話し合いの中で、同じ気持ちの人がいたんだと気づくことで、落ち着いたり安心できたりする」などという感想から、体験だけでなく、不安や戸惑いの感情も共有されてい

くと感じられます。

みんなの前では緊張して意見を言うことに苦勞する学生もいますが、回を重ねることに、面白さを感じてくるようで、「あの授業は絶対出た方がいい」とか、三・四年次の教育実習の後に「また、FB授業やりたい」という声が聞こえてきます。

言語化や他者の意見の消化に苦勞しながらも、記録と話し合いが起点となって、保育を振り返って考える意識や、考えながら保育する態度が、少しずつ獲得されていく印象をもっています。また、初めは子どもの様子が話題の中心だったのが、回数を重ねるうちに、自分自身の振る舞いや、その時の思いが語られるようになってきます。保育しながら子どもを理解しようとする、かわっている自分がどのように解釈しているのかと、自己の保育に対する枠組みを問わざるを得なくなるからでしょう。決めつけるような断定的な発言も、語尾が軟らかくなってきます。 上垣内 伸子

佐治から上垣内への第一信

上垣内伸子様

メールありがとうございます。お送りした報告書を見てねいに読んでくださり、うれしく思います。

さて、授業について説明していただき改めて気づいたのですが、十文字大は参加型の実習なので、お茶大は観察実習なので、基本的には子どもに触れることはありません。このように実習内容が大きく異なるにもかかわらず、保育現場に出かけて得てきたものを省察することは、学生の子ども観・保育観形成の上で重要な学びとなりうるということがわかり、興味深く思いました。

この省察の要である話し合いのあり方について、お互いの相違を明らかにしながらお伝えすることにしましょう。十文字大では、実習して記録を提出した後話し合いの授業がもたれていますが、お茶大では、実

習直後に話し合いをして、その授業後に記録を書くようにしています。また、話し合いの流れは、まず観察したクラスごとの小グループで情報交換をし、その後全体で報告し合い、その中に教員のコメントも加えるようにしています。

この観察直後の話し合いについて、学生に感想を求めますと、「観察を共有することで、自分一人の考えにとどまらず（見てきたことを）より深く考えることができた」、「観察を共有したことは、他者の体験から学ぶだけでなく、自分の体験をも大切にできる機会となった」など、観察を共有する意味をとらえた声が聞かれました。

保育の事象に自分の目で向き合って黙々とメモをとった学生たちが、大学の演習室に集まると喜々として見てきたことを語り始めます。全身の感覚を視覚に集中させるようにして個々に意識を働かせた学生たちが、情報交換を始めるとたちまちそれぞれの視点の違

いに出あい、一人ひとりの感覚に揺さぶりがかけられていきます。その揺さぶりによって感覚の内側に閉じられていた視点が開かれ、新鮮な発見という形で横のつながりへと意識の広がり生まれるようです。他者の視点に出あうことで自分の視点が明確になり、観察を意味づけていこうとする学生の姿がここにあったように思います。

十文字大の授業では、「話し合いの」グループに共通する課題が書かれているレポートを取り上げ、その中のエピソードについて自分の体験を踏まえながら考えていくような話し合いがなされていますね。お茶大では、学生の記録をまとめて毎回の授業時に配布し、全員で共有するようにはしていますが、観察直後の話し合いであるために、記録を取り上げるタイミングがつかみにくくなっているように思います。今後工夫していきたい点です。ただ記録であれ観察であれ、それを共有する体験から、学生たちが互いの存在を肯

定的にとらえ、自ら保育を考えていこうとする学びの充実感につながってくれることは、学びが学生にとって主体的なものであつてほしいという授業者の願いと重なりうれしく思います。

私たちそれぞれの授業に共通して行われている話し合いも、詳しくうかがうと特徴的なことが浮かび上がり、参考にしながら考えていきたい課題も見えてきますね。またさらに、実習とセットになっている授業を通しての担当教員の気つきなどについても、やりとりできたらと思います。

佐治 由美子
上垣内（十文字学園女子大学教授）
佐治（お茶の水女子大学専任講師）

注 お茶の水女子大学『人文科学研究』第三卷（二〇〇六年版）および第四卷（二〇〇七年版）の抜き刷りをさしている。